［１２］

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 永崎研宣（ながさききよのり） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(文化交渉学) |
| 学位記番号 | 博第 478 号 |
| 学位授与の日付 | 平成 26 年 9 月 18 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 2 項該当 |
| 学位論文題目 | デジタル時代の人文学における文化交渉 |
| 論文審査委員 | 主査　教授　二階堂　善　弘 |
| | 副査　教授　吾　妻　重　二 |
| | 副査　教授　内　田　慶　市 |
| | 専門審査委員　准教授　酒　井　真　道 |

# 論文内容の要旨

学位請求論文「デジタル時代の人文学における文化交渉」は、東京大学大学院情報学環特任准教授永崎研宣氏のこれまでの研究成果をまとめたものである。

本論文の構成は以下の通りである。

第 I 部　人文学の文化とデジタル文化の交渉

1 歴史的動向の概観

2 関連研究の動向

3 人文学研究から見たアーカイビングに関する動向

4 「文科系ネットワーク」の管理における倫理的問題

5 匿名コミュニケーション資料の可能性

6 「オープン」と人文学

第 II 部　仏教学とデジタル文化の交渉

7 メディアと人文学・仏教学

8 デジタル・アーカイブにおけるコンテンツのサイクル

9 デジタルメディアにおける仏教文献の諸課題

第 III 部　次世代人文学の枠組へ向けて

10 文字の問題

11 文書の構造化がもたらす新たな可能性

12 アラビアンナイトとテクストデータベース

13 テクスト要素の粒度についての検討

14 テクスト要素間の関連情報についての検討

15 大蔵経とコラボレーション

16 書誌情報 DB とコラボレーション
17 パラレルコーパスとコラボレーション
18 適切な記述手法の探究
19 相互運用としてのコラボレーション
20 レクシコンとコラボレーション
21 リソース連携によるテクストの新たな可能性
22 デジタル時代における著作権問題
23 翻デジ 2014：クラウドソーシングがもたらす可能性
第 IV 部　終わりに
A SAT2014 の利用方法
B 翻デジの利用方法

第一部では「人文学の文化とデジタル文化の交渉」として、現在、この動きの中心となっている学問領域である DH（Digital Humanities）の源流から現在に至る流れとその背景について、デジタル技術から導かれる社会的及び文化的状況と、そこにおける人文学という観点から検討する。

第二部では、デジタル以前の様々な媒体との経緯を視野に入れつつ、東アジアの人文学として有力な分野の一つである仏教学においてデジタル文化が介入してきている状況を分析する。まず、現在のデジタル媒体へと接続していくとされる口承から筆写、活版印刷という流れを押さえつつ、東アジアにおける木版印刷と活字文化についても検討を行なう。さらに、デジタル文化との交渉のなかで変化しつつある仏教学の枠組みの現状についても検討を行なう。特に『大蔵経』とそれに関連するプロジェクトの進展について、構築に実際に関わった経験を元に、精緻な分析を行う。

第三部では、筆者が関わるプロジェクトにおいて次世代人文学の枠組を構築していくために試みられてきた様々な取り組みについて報告し検討する。ここでは、Web の普及によって実現性が高まってきた、人文学研究に関心を持つ様々な立場の人々の比較的自由な人文学への参加について検討を行なう。さらに、東アジアに特徴的な文化資料の扱いに関して、文字コードやテクストの要素といった観点で議論の余地が大きいことから、デジタル文化が要請するところの標準化と人文学における共有基盤との齟齬と今後の可能性について検討するとともに、その解決策を提示する。文字コードの問題についても、研究者の立場、また実際にユニコードに携わる立場の双方からの分析を行っている。

# 論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文では、デジタル時代に入ってからの人文学研究がどのように変化していくか、その具体的な経緯についての分析を行っている。この動きは現在でも続いており、その未来における展望に対する提言ともなっている。特に『大正大蔵経』が編纂される過程から、それがデジタル化されて公開されるまでの経緯についての分析は大変精緻なものとなっており、これは余人の及ばないところであると考える。また文字コード問題についても、単なるユーザーの立場ではなく、実際にユニコードの制定に関わるといった視点からの提言となっている。人文学研究のデジタル化を実際に推し進めてきた筆者ならではの分析が随所に現れている。非常に優れた文化交渉的研究であり、学位（文化交渉学）に値する十分な内容を備えていると思われる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。